



シリーズ
探訪・探求
訪れたいまち
第三十一回
長崎県波佐見町

やきもののまち、 波佐見町

庶民のための器として
親しまれてきた波佐見焼

江戸時代、大阪の淀川よどがわを行き来する舟の乗客に「飯くらわんか、酒くらわんか」と声をかけながら軽食や酒を売る商いが繁盛していた。使われた器は「くらわんか碗」と呼ばれ、飲食後は淀川へポイと捨てられた。その後、使い捨てられるぐらい安い日常食器を「くらわんか」と呼ぶようになる。波佐見は世界に類を見ない巨大な登窯のぼりがま。



▲くらわんか碗。素早い筆使いで生き生きとした模様が描かれ、素朴な温かみを感じられる。

暮らしの中に歴史や文化、
やきものや農業の営みが息づく

波佐見焼の郷・波佐見町は長崎県の中央部に位置し、緑豊かな山々に囲まれた盆地で、長崎県で唯一海に面していない「海なしまち」。やきもの他に農業も盛んで、のどかな田園風景が美しい所だ。歴史・文化のあるやきもの郷のまち並み、酒蔵さかづくらを始めとする歴史的建造物、山あいの棚田や茶畑、川沿いに広がる水田の風景。これら魅力ある「波佐見らしい景観」を未来につなぐため、住民や行政など地域が一体となって守り育てることを目指している。



しゆく
宿地区

▼久保田家住宅 (長崎県まちづくり景観資産)



▲今里酒造 (国登録有形文化財)

▶旧波佐見町立中央小学校講堂兼公会堂。和洋の要素を取り込んだ秀逸な意匠の大型木造建築物。国の登録有形文化財に登録された。

▼内部は吹き抜けて思いがけない広さに驚く。音の響きがすばらしく、音楽イベントなどが開かれる。



西ノ原地区



▼旧福幸製陶所建物群 (きゅうふっこうせいとうしよたまてものぐん) (国登録有形文化財)



かつての屋号が玄関先に立つ。いくつ見つけられるかな？



鬼木地区



◀「日本の棚田百選」に選ばれた鬼木棚田(おにきたなだ)は四季折々に美しい姿を見せてくれ、毎年9月に開かれる「鬼木棚田まつり」ではユニークな案山子(かかし)コンテストなどでにぎわう。



中尾地区

至る所に飾られた波佐見焼やレンガ煙突が窯元のまの霧田気を盛り上げる。



波佐見町役場の佐藤さん(左)と西さんとマスコットキャラクターのはちまる。「来なっせ100万人」をスローガンに、町民の皆さんと一緒に観光によるまちづくりを進めています。年間を通して途切れることのないイベント、やきもの体験や農業体験などの体験メニュー、復活したはさみ温泉、新しい宿泊施設などを揃え、たくさんの方が訪れてくださるのをお待ちしております！



はちまる

▼中尾郷のまち並み。17世紀中頃からやきものを生業(なりわい)としている密集集落で、やきものに関する遺産が多く残され、訪れる観光客は年々増えている。奥の山肌に見えるのは江戸時代に築かれた中尾上登窯跡(なかおうわのぼりかまあと)で、世界第二位の規模であった。



▼陶房「青」ギャラリーの外観と店内



▲中尾郷自治会長 北村さん

◀中尾郷の窯元の一つ、陶房(とうぼう)「青(あお)」の吉村さん。工房にはIターンの職人さんやドイツから来た職人さんもいる。御年90歳のおばあちゃんも現役で作業をしている。ギャラリーに並ぶモダンな器は若い女性に人気が高いが、吉村さんは伝統ある染付をこれからも大事にしていきたいと語ってくれた。

伝統と革新 お互いを引き立てる二つの存在

波佐見焼の窯元かまもとが多く集まる中尾郷なかおへは、いくつもの煙突が並ぶノスタルジックなまち並みが魅力だ。入り組んだ路地裏をゆつくり散策しながら、一軒一軒窯元をのぞいて回る。ぬくもりある波佐見焼を眺めていると、「どうぞ〜」とお茶をすすめられる。波佐見の人はおもてなし上手だ。

中尾郷に生まれ育った自治会長の北村さんに「古いまち並みがきれいですね」と話しかけると、「普通に生活しているだけで、何もしていないよ」と笑う。

「住んでいると価値が分からなかった。そのうち『路地裏がいい』『古い雰囲気がいい』と耳にし、それを守るためになんとかしなくちゃいけないと考える

▶文化の陶「四季舎(しきしゃ)」館長の畑中さん。県認定の「地産地消こだわりの店」として、地元で採れた食材を使ったメニューで楽しませてくれる。使う器はもちろん波佐見焼。昭和初期に建てられたやきもの工場を改修した店内は、真ん中に囲炉裏(いろり)があり、窯ではピザを焼くこともできる(要予約)。窯めぐりのひと休みにいかがですか。



▲文化財保護係の中野さん

景観行政団体

景観法に基づき景観行政を担う主体として、都道府県、政令市、中核市がなるとともに、都道府県との協議を経たその他市町村がなることができる。景観行政団体は良好な景観形成のため、景観に関する規制内容などを定める景観計画を策定することができる。波佐見町は平成24年に景観行政団体となる。

波佐見町景観計画

まち全域を景観計画区域に定め、緩やかなルール設定により広域的な観点で景観誘導を図っている。また、特に重点的に景観形成を進めることが必要な区域として、鬼木棚田、陶郷中尾山、宿郷、西ノ原の4つの区域を重点景観計画区域(案)に指定する検討が進められている。

ようになりました」(北村さん) すでにあったものの中から、新たな価値に気付き、それを守りつつさらに美しいものに変えていく。何もしていない”が価値になった。 「県のまちづくり景観資産に登録され、住民が主体的に景観を守ろうとさまざまな活動をしています。それに波佐見の人間は研究心が旺盛。若い窯元の感覚と、センスを重要視する若いお客さんの感覚がマッチして、”ニュー波佐見焼”も生まれました。おかげさまでたくさんの方の観光客が来てくれるようになったんですよ」(北村さん) 流行に左右されない伝統と時代に即して新しいものを生み出す力。波佐見

の魅力を語ろうとすると不思議とこの相反する言葉が出てくる。 波佐見町教育委員会文化財保護係の中野さんは「歴史や文化を調べ、波佐見には貴重な宝がたくさんあるということが分かっています。それを生かしたまちづくりを進め、後世に伝えていきたい」と未来を描く。 穏やかなまなざしの中野さんがこう結んだ。「出張授業で小学校に行き、子どもたちに波佐見の歴史を話す機会をもらっています。子どもたちには波佐見に生まれ育ったことを誇りに感じて欲しい」 この誇りが、波佐見らしい景観を未来につないでいくものになるだろう。